

INTERVIEW：インタビュー

俳優・ナレーター

地曳 豪さん

今月のインタビューは、テレビでこのかたの声を聞かない日はないのではないのかというくらい、数々の有名企業の TVCM のナレーターとしても活躍されている俳優の地曳豪さんです。

若松孝二監督の映画『実録・連合赤軍あさま山荘への道程』で注目され、映画、テレビ、舞台、CM などで幅広く活動される地曳さんに、俳優になったきっかけ、役作りで心掛けていること、映像の仕事と舞台の仕事の違い、ナレーションでよい声を出すコツなどをお話いただきました。

「仕事の依頼を受ける秘訣はないですね。一回一回頑張るだけです」と語る地曳さんの言葉に、弁護士の仕事と共通するものを感じました。

(聞き手・構成：西川 達也、佐藤 光子)



—— お芝居を始められたのは、どのようなきっかけだったのでしょうか。

父の仕事の関係で、シンガポールとアメリカに3年ずつ、小学校の1年生から6年生まで海外に行っていたので、日本に帰ってきて日本の学校生活に全然なじめなくて、母によると本当に明るかった子どもが笑わなくなっただけなんです。

母がとても心配して、歌ったり踊ったりしてストレス発散になったらいなということで児童劇団に入れたのがきっかけでした。それが14歳のころです。

—— その後、高校、大学でもずっと演劇は続けられていたのですか。

高校1年生のときに1回、連続ドラマの仕事をしました。しかし、高校受験で芸能活動ができることを狙って学習院に入ったのですが、学習院では「芸能活動」というのは能とか歌舞伎などの伝統演劇を指すんですね。それで、学校側からテレビに出るような芸能活動をするんだったら高校をやめてほしいという話をされました。

母が、歌舞伎も能も昔は大衆演劇だったので、大衆演劇という分類で考えたら同じではないかという手紙を校長先生に書いたんです。結構、説得力のある

手紙だったらしくて、今回は特例で認めるからこの後はやらないでほしいということになりました。僕も、せっかく入った学校だったから、演劇はお休みして、再開したのは大学からですね。

—— 大学は法学部でしたね。

何で法学部にしたかという、法学部政治学科は卒論がなかったからなんです。大学に入ったらすぐこの仕事を再開するつもりだったので、卒論がない学科に入れば在学中は演劇に集中できるかなと思って選びました。すみません、不純な動機で（笑）。

大学を卒業した後に、やはり演劇の舞台の勉強をしないとだめだと思って「演劇集団円」という岸田今日子さんらがつくられて、渡辺謙さんも在籍されていた劇団の研究所に入りました。研究所で演劇の勉強をして、その後に原田大二郎さんの事務所に入ったんですけれども、1年半ぐらいでそこがなくなっちゃったんですね。

その後に所属した事務所で、仕事のない時期が30歳ぐらいまで続きました。その後に若松孝二監督と知り合ったことがきっかけで事務所を辞めて以来、事務所には入らずにフリーランスで活動しています。

——プロとしてやっていこうと思ったのはいつ頃からでしたか。

児童劇団に入ってから、コマーシャルの仕事をしていましたし、高校生時代の連ドラの仕事もちゃんとギャランティーが発生していたので、そうした意味では最初からプロとしてやっていくつもりだったと思います。

ただ、仕事をやっている絶対をやめようかなと思う時期があるじゃないですか。その都度、その都度、いや、でも一生やろうと思う決意が固くなるから、最初と今とではまったく意識が違うと思います。

20代中盤から30歳ぐらいまで、本当に6年くらい仕事がない時期があって、もうやめようかなと思って、でも他に何かやりたいことも見当たらなかったし、ずっと頑張ってきたから、ちょっとでもいいからお芝居の仕事にかかわりたいなと思って、頑張ろうと思ったその年に若松監督に出会いました。

——今、お名前が出た若松孝二監督の映画『実録・連合赤軍あさま山荘への道程』では、赤軍派のリーダー森恒夫役を演じられて、迫力ある演技に引き込まれました。役作りというのはどのようにされるのでしょうか。

あの映画に関しては、仕事がない時期が長かったので、鬱屈とした思いみたいなものがすごくいいタイミングで全部出せた仕事でした。あの時期の自分じゃないと出せないものが出せていたんじゃないかなと思います。

役作りということで考えれば、『連合赤軍』の登場人物は実在の人物なので、その方々が書いた書物とか、そういうものを讀んだりしましたが、例えばどんなに社会主義のことを勉強しても、社会主義に対して登場人物と同じ思い入れは絶対ないんですよ、僕たちって。

じゃあ、何に対してだったらそういうふうになれるかといったら、自分にとってお芝居だったり、演劇だったりする。僕が演じた森さんは、学生運動をしていた先輩たちがいなくなって、そのグループを保持させるのでいっぱいいっぱいになっちゃった人なんです。その運動を何とかしたいという気持ちと、僕がやってお芝居ができて、やっとここで自分を表現できるという思

いが、あのときは完全に僕の中でリンクしていました。

僕は演技は、結局その人自身しか出ないのではないかなと思っています。もちろん役作りは必要ですし、その役の背景も調べます。でも結局自分自身の本当の言葉じゃないとお客様には届かないのではないかなと思っているので…そういう意味で演技は自己表現なのかなと思っています。

——最近では岩井俊二監督の映画『リップヴァンウィンクルの花嫁』に出演されています。岩井監督と若松監督とでは世界観も違いますし、求められるものも違いそうですね。

若松監督はほぼリハーサルをしない監督なんですね。普通は照明もチェックしなきゃいけないし、その俳優さんがどういう音量の声を出すかというので、音響さんも録音のボリュームを調整しなきゃいけないから、何回もリハーサルをやるんですね。でも、若松監督は基本的には照明もパッパッと作って、すぐ一発本番で、何回も撮らない。

岩井監督も実はそういうタイプで、岩井監督は自分で照明が作れるので、照明を組むのが早いんですよ。パッパッとやっちゃって。それでリハーサルなしで。

リハーサルがないという点で、生々しさというのはすごく似ていましたね。僕は若松監督と何度もお仕事をご一緒させていただいていたので、岩井監督ともやりやすかったです。

——意外な共通点があるんですね。

何か全然違うタイプの監督っぽく見えるんですけど、岩井監督も生々しいんですよ、映画を見ると。

——7月には、舞台『二度と燃えぬ火』（作：ジャン・ジャック・ベルナール、構成・演出：札内幸大）に出演されています。舞台の仕事と映画やテレビの仕事というのは違う点はありますか。

舞台は本当に久しぶりだったのですが、改めて映像と舞台では全然違うんだなと思いましたね。舞台は、全部見られているし、失敗もできない。映像は間違っ

たら、もう1回お願いしと言えますけど、舞台は言えない。お客様の前でやるということも全然違うし、毎回、来ていただくお客様で劇場の雰囲気が全然違うんです。日によって劇場の雰囲気を暖かく感じたり、少し堅く感じたり。そのことでお客様の反応も変わりますし。そういうのも久しぶりに感じて、やっぱり舞台は面白いなと思いました。

——舞台の日程を見ると、昼夜公演の日もある中で、ほぼ休みなしで1週間連続だったり、体力的にも大変かと思うんですが、体力づくりなどは積極的にされているのでしょうか。

ロシアの格闘技でシステマというのをやっています。あとは、もともと古武術をやっていたんです。居合はもう今年で13年目ぐらいです。あとはダンスをやっています。

仕事が入っちゃうと何もできないので、仕事がないときにちゃんとメンテナンスして、何かあったときに備えるという感じですね。

——ストレス解消法はありますか。

日々の稽古です。道場へ行ったり、システマをやったり、ダンスをしたりという、もうそれしかないです。

お芝居って、うその物語だけど、本当に怒ったり泣いたりするわけですから、本当に怒ったり泣いたりするときのように疲れるんです。だからストレス解消には、運動が一番いいんじゃないのかなと思います。運動しておいしいものを食べて、それで散歩したりして。楽しいお酒をほどほどにして。

——英語がお得意ということですが、将来的にはアメリカなど海外進出も考えていますか。

実は去年からロサンジェルス事務所所属していて、今もオーディションを受けている最中です。向こうに住んでいたということもあるし、海外に1人で行ってしゃべることに対してそんなに抵抗がないので、是非海外でやりたいですね。「何だろう、あいつ」という存在になれたらいいかなと思っています。

——ナレーションのお仕事もされていて、錚々たる有名企業のCMのナレーションを担当されていますが、ナレーションの仕事を始めたきっかけは？

ナレーションの最初の仕事がJTのCMだったんです。そのCMの監督が主人公を演じる役者を探していて、『連合赤軍』に出ているこいつを探してこいと。キャスティングの方が自分を探してくれてオーディションを受けられたんです。

最初はナレーションの仕事を続けていけるとは思っていなかったのですが、そのCMが2年間ぐらい流れていたんで、それを見て意外な依頼が来たりして、少しずつつながって。JTのときにかかわった人が他の人を紹介してくれたり、その紹介された人がまた違うところに自分の声を紹介してくださったりして、徐々に徐々に少しずつ仕事が増えていきました。

でも、元をたせば『連合赤軍』なんです。だから若松監督がいなかったらこの仕事もなかった。ナレーションでやっていけることもなかった。

——錚々たる有名企業のCMを担当されて、テレビで地曳さんの声を聞かない日がないというくらいですが、依頼を受ける秘訣というのはあるのでしょうか。

秘訣というのはないですね。本当に一回一回頑張るだけです。また使いたいと思ってもらえるような仕事をしたいと思って頑張っています。

——ナレーションについて、ここはどのように読んでほしいとか、そういう指示はあるのですか。

クライアントさんによって違います。自分は大きな抑揚をつけてやるのはあまり好きじゃないので、割とフラットに読む方なんです。でも、それを嫌いなクライアントさんもたくさんいらっしゃる。

最初は、自分がこういう感じでと提示したものに対して監督がいいよと言っても、後でクライアントチェックがあって、あ、これは全然だめだと。外されてナレーターを交代するということは結構ありました。

でも、それもお芝居と同じなので、やり方を変えられないからしょうがないだろうと思っていました。だか

ら、取りあえず一生懸命頑張る。どう一生懸命やるかというと、心を込めるんです、本当に。その会社の社員のつもりで読むぐらいの感じで。

—— 後から外されてしまうという、ちょっと怖いところもあるんですね。

この人だめだから違う人と呼んで、ということがやっぱり最初はありました。今は地曳豪というナレーターが少しずつ浸透してきて、地曳君はこういう読み方をする人だねと分かって呼んでもらっているの、最近収録後に交代になることはほとんどなくなりましたね。

—— 顔の見える映像や舞台と、顔の见えないナレーションの仕事というのは、何か違いはあるのでしょうか。

基本的には集中力という意味では同じだと思っています。集中を保って読むものってやっぱり人の心に伝わったりするので。そういう面ではナレーションとお芝居とで同じ感性を使っていると思います。

—— とても落ち着いた良い声をしていらっしゃるんですが、良い声で話すコツはありますか。

声は使えば使うほど鍛えられるものだから、時間があるとき週に1回くらい1人でカラオケに行って声を出しています(笑)。リミットを超えて大きい声を出していると、小さい声でも、声が通ったりするんです。

あと、ウォーミングアップしていないと声が出なかったりするので、ナレーションの前はある程度体を動かします。やっぱり声帯も血液が通っているし、温まってないと震えが悪いんじゃないかと思っています。

—— 映像や舞台の仕事とナレーションの仕事はどちらが好きですか。

みんな好きです。全部面白さが違うので。

やった仕事に対してのレスポンスが速いのは圧倒的にCMのナレーションです。仕事の結果次第で次の仕事が決まる反応が、他の仕事では体験したこともない速さだったので、やり甲斐はあります。

舞台も、今回久しぶりにやってお客様の前に立つということの恐ろしさと、これを日常でやっている人はすごいなということを改めて感じましたね。

映像の仕事で一番好きなのは、映画かな。特に、1回しかやらない、リハーサルなしでやる若松監督とか岩井監督みたいな現場のヒリヒリした感じというのは、1回やっちゃうと忘れられないです。お芝居が楽しいと思う瞬間だと思います。

—— これからやってみたいお仕事はありますか。

海外での仕事はしたいですね。ずっと海外で仕事をしたいということを思っていて、どうしたら仕事ができる可能性があるかということがやっと分かってきたので。今年はいろいろオーディションを受けたりして、これからちょっと楽しみだなと思っています。

日本での仕事は、いつか時代劇をやりたいですね。帰国子女だったので、向こうで見るものって時代劇なんです。海外にいと日本って何だろうと考えることも多くて、時代劇がすごく好きになったんです。時代劇は、自分が日本に帰ってきたころは毎日のようにテレビでやっていたんですよ。今、時代劇をやっているのって本当にNHKぐらいになっちゃって。でも、残さなければならぬ文化だと思います。

自分が何で居合を始めたかという、もともと時代劇がすごく好きだったからなんです。これまで時代劇には全然かかわってないですけど、いつかやりたいなと思っています。

プロフィール じびき・こう

1976年5月7日生、東京都出身。183cm/75kg。学習院大学・法学部卒、円演劇研究所・専攻科卒。特技：英会話、乗馬、ダンス、陸上ホッケー、古武術、空手、殺陣。現在、フリーで活動中。出演映画：「実録・連合赤軍」若松孝二監督(2008年)、「リップヴァンウィンクルの花嫁」岩井俊二監督(2016年)等。CM(ナレーター)：アサヒスーパードライブレミアム、大正製薬/パロンSゴールドW、ネスレネスカフェゴールドブレンド、ソニー生命等。テレビ：土曜ワイド劇場「検事・朝日奈耀子シリーズ」テレビ朝日(2008年～2009年)/土田刑事役・レギュラー、水曜ミステリー9「鑑識捜査班・九条礼子～骨を知る女」テレビ東京(2011年)/香坂役等。舞台：「ジュリアス・シーザー」、「二度と燃えぬ火」(2016年)等。他、幅広く活躍中。